

昭和文学の胎動

同人雑誌『日曆』初期ノート

川端要壽

川端要壽

昭和文学の胎動

同人雑誌『日曆』初期ノート

福武書店

昭和文学の胎動

—— 同人雑誌『日曆』初期ノート

一九九一年二月一〇日 第一刷印刷
一九九一年二月一六日 第一刷発行

著者 川端要壽

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社福武書店

東京都千代田区九段南二―三―二八
〒100 電話 〇三三三〇一二三二
振替口座 (東京) 六一一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 加藤製本

(落・乱丁本はお取替え致します)

(定価はカバーに表示しております)

川端要壽 (かわばた・ようじゅ)

一九二四年、岐阜市に生まれる。東京府立化学工業学校で、吉本隆明と同級になる。横浜高等工業学校 (現横浜国大工学部) 電気化学科卒。同人雑誌「北斗」「内部」「星座」「文学街」「小説家」に参加。著書に「堕ちよ!」「さらば」「徳間書店」「修羅の宴」(砂子屋書房)「春日野清隆と昭和の大相撲」(河出書房新社)がある。現在「大相撲」(読売新聞社)に、「三子山勝治伝」を連載中(一九九二年一月河出書房新社発刊予定)。



上段左

『集團』昭和5年7月創刊。高見順、
渋川驍、荒木巍、石光葆らが同人。

中段左

『日曆』第1号 昭和8年9月。

中段右

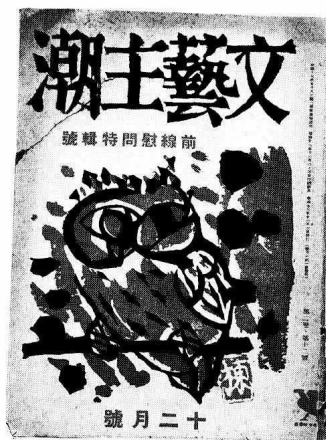
『日曆』復刊第1号 昭和26年9月。

下段左

『人民文庫』昭和11年3月創刊。

下段右

『文藝主潮』昭和17年1月創刊。





東大生の頃の

田宮虎彦（昭和9年）

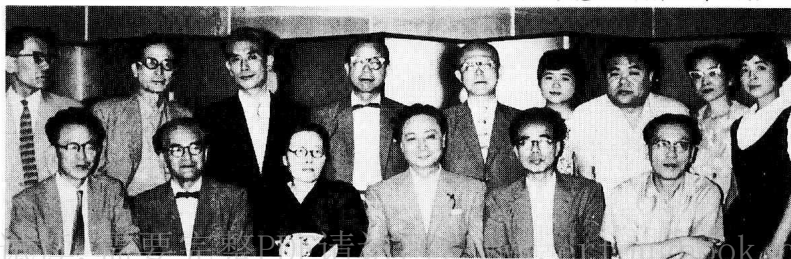
『日曆』を

日曜会の箱根旅行 左より高島正、倉橋弥一、渋川驍、宇野浩二、川崎長太郎（昭和17年10月石光葆撮影）



日曜会の十週年記念 前列左より石光葆、矢崎弾、間宮茂輔、宇野浩二、田畑修一郎、徳永直、倉橋弥一、後列左より田辺茂一、渋川驍、野口富士男、新田潤、高島正、中野重治（昭和18年2月）

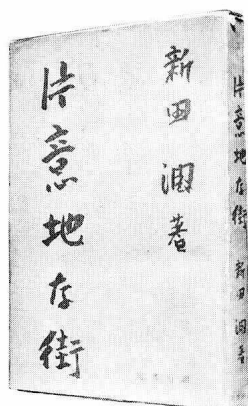
『日曆』28号同人会 前列左より石光葆、新田潤、大谷藤子、高見順、渋川驍、古我菊治、後列左より若杉慧、中尾彰、摩寿意善郎、藤田貞次、菅本正夫、1人おいて千田九一、荒木巍夫人（昭和28年1月）



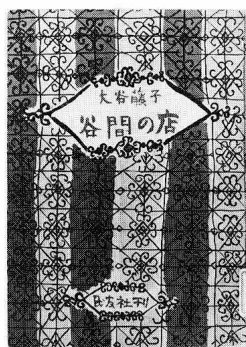
「炎天」 昭和16年9月刊



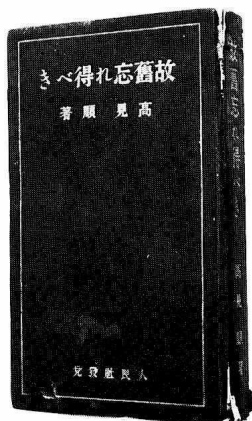
「片意地な街」 昭和16年12月刊



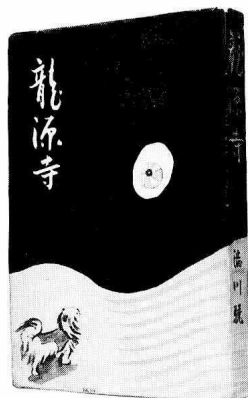
「谷間の店」昭和22年2月刊



「故旧忘れ得べき」 昭和11年10月刊



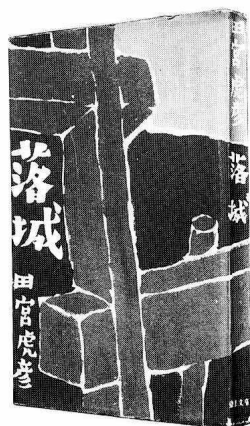
「龍源寺」 昭和13年6月刊



「神楽坂」昭和11年12月刊



「落城」 昭和26年3月刊



「人民文庫」同人の
単行本 (昭和12年~15年刊)



「明暗の境」昭和8年1月刊

めぐる人々



帝大新聞懇親会 前列右から2人目渋谷川驍
(昭和6年)



制作班同人 後列左より、1人おいて高見順、新田潤、石田愛子、2人おいて神山建夫、1人おいて十朱久雄 (昭和3年)



左より古我菊治 荒木巍 古我夫人、同長女 (昭和10年10月)



『日曆』第10号記念パーティー 左から高見順、大谷藤子、矢田津世子、円地文子 (昭和10年5月)

目次

第一章 創刊時の人々 7

第二章 『日曆』創刊 55

第三章 新同人（田宮・矢田・円地ら）加入 105

第四章 『人民文庫』時代 141

第五章 『人民文庫』以後

215

あとがき

235

参考文献

238

装
丁
山
高
登

昭和文字の胎動——同人雑誌『日曆』初期ノート

第一章 創刊時の人々

1

同人雑誌『日曆』は、平成元年十二月二十日発行の最終号（84号）を最後に栄光の幕を閉じた。創刊号は昭和八年九月二十日発行であるから、その寿命は五十有余年で半世紀以上にわたり、この間戦争で断続があったといえども、まずわが国最長命の同人雑誌といわざるを得ない。

最終同人は古我菊治、渋川驍、中尾彰、木本欽吾、萱本正夫、福田清人、荒木太郎で、平均年齢はゆうに八十歳を越えており、古我、渋川は創刊以来の同人であり、中尾は第七号（昭和10年2月）以来の表紙・カットの担当者であった。

渋川驍は、最終号の「終刊に思うこと」で、無念やるかたなく次のように書いている。

——できればもっと継続したかったが、それが難しくなった。同人が少くなり、雑務を取る者も老年に達して、経営に負担を覚えるようになったので、残念ながら『日曆』を廃刊する気持が強くなった。その意向を同人会に計ったところ、各同人もそれに賛意をよせられたので、それを決行することにした。～

『日曆』の終刊について、朝日新聞（平成2年1月8日付）と東京新聞（平成2年2月1日付）では次の記事を寄せている。

「ある終刊号」安岡章太郎

昨年の暮れ、「日曆」の終刊号が出た。この輝かしい文芸同人誌について、いまさら私などが何か付け加えることはないだろう。創刊は昭和八年、私が中学に入ったとしだが、当時同人だった人たちはすでに大学を出ていたわけで、思えば古色蒼然たるはなした。しかしページをひらくと、同人諸氏の文章の足腰は皆シャッキリとして、まことに矍鑠たるものがある。あるいは昨今の作家とは年季も鍛練も違うためであらうか。

すでに昭和三十年代の頃から、各大手出版社は新人賞と称する懸賞小説の賞を設け、文壇に登場する新人たちは、殆ど全員が何らかの新人賞を獲得しているといって過言ではない。そのぶん同人雑誌の役割は減少しているわけだ。それが全面的に悪いことだとは言わないが、懸賞小説に多くの弊害が伴うことは事実である。これについて、洪川驍は『終刊に思うこと』で、次のように述べている。

——（新人賞は）經營的必要から生れたものである。それは文学という名を冠しているが、その文学性はただ名目上利用されているものである。したがって、それらの作家への眞の信頼は薄く、その経済性が薄くなれば忽ちそれらの出版社は、それらの作家を見放してしまう……

べつに眼新しい説ではない。しかし、いま私たちはこの古めかしい常識論を真剣に振り返る必要がある。古い同人誌の終刊が文学そのものの終末にならぬために、作家も出版社もぜひこのことは反省すべきである。

『日曆』の終刊 米寿（大波小波）

昭和八年創刊の同人雑誌「日曆」が第八十四号限りで終刊となった。(略)高見順、新田潤、大谷藤子、荒木巍、渋川驍らが「新しい道を開こう」と唱えて始め、のちには岡地文子、田宮虎彦、矢田津世子といった人たちが名を連ねたこの名門誌も、最近是一年一回の発行もおぼつかなく、物故同人の追悼特集ばかりが目立つようになっていた。終刊時の同人は七名にすぎない。

渋川の文章は終刊の挨拶のあと、「近時、同人雑誌の役割が軽んぜられている」とつついて行く。その代わりに懸賞による新人発掘が盛んだが、渋川によれば懸賞小説には三つの弱点がある。第一に投機的になりやすいこと、第二に特異な題材に頼って芸術性が薄くなること、第三に僚友が得られないこと。それと対照に一生同人雑誌に情熱を注いだ人として武者小路実篤の業績を挙げ、「この事実を振り返り見ることを人々に勧めたい」と結んでいる。

小出版社青桐書房を自前で作り、純文学と信じる作品を出版し続けている渋川らしい主張だが、それに真剣に耳を傾ける人が決して多くないことは疑えない。だからこそ「日曆」を終刊しなければならなかったわけだろう。一同人誌の終焉にすぎないと言ってしまうがそれまでだが、或る時代の人々の志も同時に消えて行くのかと思うと一片の哀傷を禁じえない。

平成二年の正月のある日、私は友人小沼肇氏、辻史郎氏と久保田正文氏を訪問した。その折、談たまたま『日曆』の終刊に触れ、久保田氏は「渋川さんの『終刊に思うこと』は、昨年の評論部門でも傑出したものです」と語っていた。

古我菊治は明治三十八年九月二十八日、滋賀県高島郡西江州東秋留村の宮大工の家に生まれ、京都の同志社の英文科を昭和四年に卒業した。

家がさほど楽でなかったたので、大学時代は牛乳配達などのアルバイトをしている。

「学生援護会の寮に入っていて、立命館の学生だった田中伊佐次と同室でした。田中は雄弁家で、堀池町通りの夜店に出て、テキヤの仲間に入って、古本を売っていましたよ」

古我は卒業すると、かねてからの恋仲であった京都の女性、林知子とともに東京へ駆け落ちしてきたのである。

古我が居をかまえた家は、東京府北多摩郡落合村で（現在の西落合）、武蔵野線（西武線）の中井駅から下落合に向かって五、六百メートルほど行ったところにあった。目白商業学校が近くにある、家の傍を川が流れていた。石神井公園の三宝寺池を水源として早稲田の関口町から神田上水に注ぐ明正寺川で、家はすぐその川つぶちに建っていた。

四畳半一間っきりの家であったが、台所と便所がつき、夕暮れともなれば、ペンキ塗りの玄関のひさしに外燈がともる、いわば当時の文化住宅で、家賃は十円であった。

東京都近代文学博物館発行の「落合文士村地図」を見ると、昭和初年にいかに多くの文士たちがこの落合村に居住していたかがわかる。もともと、その八割方はプロレタリア作家であった。

古我の家の向かい側は川をへだてて中落合であり、南側は上落合で、目と鼻の先に「放浪記」出版前の無名時代の林芙美子がマツチ箱のような二階建てに絵描きと同棲していた。また、略称プロキノ、プロレタリア芸術運動の一翼をになう映画関係の事務所の看板が横町のしもたやの軒先にぶらさがっていた。

上落合には、上野壮夫、本庄陸男、堀田昇一、山田清三郎、細野孝二郎といった作家同盟員をはじめ、村山知義、佐々木孝丸、加藤悦郎など劇場同盟員や美術家同盟員がたむろし、戸塚署特高の監視下にあった。